

Title	毒物とテリアカに関するシャナークの書(一)
Sub Title	The book of Shanaq on Poisons and Theriacs (I)
Author	稲葉, 隆政(Inaba, Takamasa)
Publisher	三田史学会
Publication year	1987
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.56, No.4 (1987. 2) ,p.125(539)- 136(550)
JaLC DOI	
Abstract	Several years ago, Dr. Yoshiyasu Uno, a professor of social psychology at Keio University, brought back from Cairo a copy of the Arabic text "Kitab Shanaq fi al-sumum wa al-tiryaq", based on "MS , tibt 60, Dar al-kutub al-misriya". Presented here is a Japanese translation of the Arabic text, made at his request. This work on poisons and theriacs or antidotes has its origin in India The work is entitled "The Book of Shanaq", Shanaq, or Chanakya, was the prime minister of the Maurya Emperor Chandragupta, but the real author is unknown. It appears that the text was introduced into the Islamic world during the reign of the Caliph al-Rashid (786-809) It is known to have been translated into Persian from an Indian language by an Indian physician named Mankah, then into Arabic from Persian by Abu hatim for Yahya b khalid b barmak (d 805), and again into Arabic by al-'Abbas b sa'id al-jawhari for the Caliph al-Ma'mun (813-833). It is said that this work is one of the three most important works on poisons in Arabic, the others being by Jabir b hayyan and Ibn wahshiya. This work can be roughly divided into seven parts by subject These are as follows (1) Admonitions to rulers. (2) The symptoms of poisoned foods, drinks, clothes, perfumes, ointments, and others, and their effects on the body and organs. (3) The recipes for twelve sorts of poisons put in foods and drinks (4) The recipe for a universal antidote called Kandahasti, and its effects. (5) The recipes for narcotics, soporifics, and other injurious drugs, and their effects (6) The effects of the twelve poisons, mentioned in the third part, on the body and organs, and the recipes for antidotes to them. (7) The recipes for ten sorts of poisons put in clothes, perfumes, ointments, and others, and the recipes for antidotes to themv
Notes	資料紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19870200-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

毒物とテリアカに関するシャーナークの書(一)

稲 葉 隆 政 訳註

一 序 文

本稿は、慶應義塾大学教授、宇野善康博士が、研究資料の一端としてカイロより持ち帰られた、アラビア語による毒物書「Kitāb Shanaq fi al-sunūn wa-al-ṭiryaq」(毒物とテリアカ「解毒剤」に関するシャーナークの書)の複写写本 (Cairo, Dar al-kutub al-miṣriya, 60 ṭibb) を、博士の御依頼により、全訳したものである。

御研究完成に先立ち、博士が当訳文の発表を許可して下さったことに対し、深甚なる謝意を表するものである。

アッバース朝の黄金時代、八世紀の中葉から九世紀の中葉にかけて、ギリシャ医学がジュンディー・シャープールからバグダードに流入し、数多くのギリシャの医学文献がアラビア語に翻訳されて体系的学問としてのアラ

毒物とテリアカに関するシャーナークの書

ビア医学の基礎が形成された。アラビア医学史上この所謂翻訳時代は、知識の摂取に極めて熱心であった時代であり、ギリシャの文献のみならず、少数ではあるがインドの医学文献もアラビア語に翻訳されたことが知られている。アラビア医学は主としてギリシャ医学に拠っており、インド医学の理論は受入れられなかったが、それらインドの文献を通じて、数多くのインドの薬物、その処方、調合法、及び用法等に関する知識がもたらされ、アラビア医学に影響を及ぼすに至ったのである。インド起源の本書も、このような時代の流れの一環として、イスラム世界に取入れられたものと思われる。

インドにおける本書の成り立ちについては不明な点が多い。本書の公称著作者はチャーナキヤである。シャーナークはチャーナキヤの転訛である。チャーナキヤは、

古代インド・マウリヤ朝の創始者、チャンドラグプタ王の宰相を務めた人物として知られており、統治について論じた「アルタシャーストラ」は、チャーナキヤの著作と伝えられている。本書は、王の健康と身の保全について説いている部分に関しては、この「アルタシャーストラ」に拠っていることが認められている。⁽³⁾ また毒物に関する諸事項を述べている部分に関しては、インド的要素と共に、ギリシャ的要素が認められている。⁽⁴⁾ しかしながら、直接のギリシャの出典は確定されていない。⁽⁵⁾ インド的要素に関しては、本書は、古代インドの二大医学書と謂われる「スシュルタ・サムヒター」並びに「チャラカ・サムヒター」と類似した部分があることが指摘されている。⁽⁶⁾

何れにせよ、本書が一部分「アルタシャーストラ」に拠っているとはいえ、チャーナキヤが本書の著者であることは疑わしい。恐らく、本書は、インドの或る人物が「アルタシャーストラ」に基づく要素とギリシャ及びインドの医学文献に基づく要素とを併せ、手を加えた上、毒物書としてまとめ上げたものであると推測されている。⁽⁷⁾

本書のアラビア語本には、後年に書き加えられたと思

われる序文の如きものが付いており、本書がイスラム世界に伝えられてからアラビア語に翻訳されるまでの経過が述べられている。それによれば、インド人医師マンカが本書をインドの言語からペルシャ語に翻訳し、次いでバルマク家のヤフヤー・ブン・ハーリドのためにアブー・ハーティム・アル・バルヒーという人物がペルシャ語からアラビア語に翻訳し、また一方カリフ・アル・マアムーンのためにアル・アッバース・ブン・サイード・アル・ジャウハリーが同様にペルシャ語からアラビア語に翻訳したとされている。⁽⁸⁾ この種の伝承伝説はあまり価値が無いとする見方もあるが、イブン・アビー・ウサイビア⁽⁹⁾もマンカが本書をペルシャ語に翻訳したことを伝えており、またヤフヤー・ブン・ハーリドが「スシュルタ・サムヒター」の翻訳をマンカに依頼したことが知られている点からみて、ともかくマンカが本書をイスラム世界に紹介したことは充分考えられる。

あらゆる時代を通じ、毒と解毒の方に関する問題は、人間にとって等閑に付すことができぬ事柄の一つであった。中世イスラム世界においても、本書がアラビア語に翻訳された他に、エフェソスのルフス、ガレン、フィلمノス、ディオスコリデス、アミダのアエティオス、ア

イギナのパウロス、アフルン、ヨハネス・グラマティコス等の毒物書或いは毒物論を含む医学書がギリシヤ語からアラビア語に翻訳され、またシェムオーン・デ・タイブーサーの毒物論を含む医学便覧がシリア語からアラビア語に翻訳された。

また一方、これらの翻訳文献に大きく依存しているとはいいながらも、全くの翻訳書とは別に、毒と解毒の問題について論じた専門の毒物書或いは毒物論を含む医学書が、幾つかアラビア語で著わされた。それらのうち、イブン・シーナーの「アル・カーヌーン・フィッ・テイッブ」(医学典範)の出現までに著わされたと思われるものを列挙すると、次の通りである。⁽¹¹⁾

ジャービル・ブン・ハイヤーン(八世紀後半在世)「キターブ・アッ・スムーム・ワ・ダフウ・マダーツリハー」(毒物とその危害排除の書)

ヤフヤー・ブン・ビトリーク(九世紀初頭在世)「キターブ・アッ・スムーム・マート・ワ・ダフウ・マダーツリハー」(毒物とその危害排除の書)

ユーハンナー・ブン・マーサワイフ(八五七年歿)「キターブ・アッ・スムーム・ワ・イラージハー」(毒物とその処置の書)

毒物とテリアカに関するシャークの書

アリー・ブン・サフル・ラツバン・アッ・タバリー(八一〇年生)「フィルダウス・アル・ヒクマ」(知恵の楽園)フナイン・ブン・イスハーク(八〇九年—八七三年)「キターブ・アッ・ティルヤーク」(テリアカの書)

アル・キンディー(八七三年頃歿)「キターブ・アッ・スムーム・マート・ワ・ダフウ・ダラリハー」(毒物とその危害排除の書)

サービト・ブン・クッラ(八三六年—九〇一年)「キターブ・アッ・ザヒーラ・フィー・イルム・アッ・ティッブ」(医学に関する宝典)

クスター・ブン・ルーカー(九一二年頃歿)「キターブ・アッ・スムーム・マート・ワ・ダフウ・マダーツリハー」(毒物とその危害排除の書)

イーサー・ブン・アリー(九世紀中葉在世)「キターブ・アッ・スムーム」(毒物の書)

アッ・ラージー(八六五年—九二五年)「アル・キターブ・アル・マンスーリー」(アル・マンスールの書)、「キターブ・アル・ファーヒル」(アル・ファーヒルの書)、「アル・ハーウイー・フィッ・ティッブ」(医学集成)

イブン・ワフシーヤ(九世紀後半在世)「キターブ・アッ・スムーム・ワ・アッ・ティルヤーク」(毒物と

テリアカの書)

ムハンマド・ブン・アフマド・アッ・タミーミー(九八〇年歿)「リサーラ・フィー・サンア・アッ・ティルヤーク・アル・ファールーク」(アル・ファールーク・テリアカの調剤に関する覚え書)

イブン・ジュルジュル(九四四年生)「マカーラ・フィー・アドウィヤ・アッ・ティルヤーク」(テリアカ薬に関する論考)

アル・マジュシー(九九四年歿)「アル・キターブ・アル・マリキー」(王の書)

イブン・アル・ジャッザール(一〇〇四年頃歿)「キターブ・アッ・サマーム」(毒物の書)

イブン・シーナー(九八〇年—一〇三七年)「アル・カーヌーン・フィッ・ティッブ」(医学典範)

これらのうち、写本が現存する毒物専門書としては、ジャールビル・ブン・ハイヤーンとイブン・ワフシーヤの著作が最も完備したものとされているが、⁽¹²⁾この両書ともかなり本書を利用していることが知られており、⁽¹³⁾本書の与えた影響を示していると共に、本書の重要性を物語っている。

本書をその内容に従って区分すると、およそ七つの部

分に分けることができる。

第一の部分は、王たる者の道について述べている部分で、慈悲を以て人に接することの重要性を教え、支配者としての責務を滞り無く遂行するために常に健康を最良の状態に保つよう説き、様々な形で振りかかる危難に対し万全の対策を講じておくよう注意を促している。そして危難に関しては、特に毒物による危難が強調されており、それが以後の毒物論展開への布石となっている。

第二の部分は、毒入りの食物と飲物の徴候、毒入りの衣類、寝具、敷物類、香料、軟膏、洗身用水、クフル墨等の徴候、及びこれらの毒をこうむった人間の中毒症候を扱っている。これらに関しては、恐らく積年の経験に基づくものと思われる細かな観察がなされており、興味深い。

第三の部分は、食物及び飲物に入れられる十二種類の毒物の製法、用法、効能について記述がなされている。これらの毒物は、何れも動物質のものを腐敗させることにより、製造されている。またこの部分で、王が自殺する目的で指輪の宝石の下にひそませておく、即効性毒物の製法が紹介されている。

第四の部分は、カンダハスティーと呼ばれる万能の解

毒剤について、その成分、処方、調合法、用法、効能を伝えている。成分を述べた箇所では幾つかの語句註解がなされているが、これは後に付加されたものと思われる。

第五の部分は、麻醉剤、催眠剤、発病剤の製法、処方、調合法、用法、効能、及び解除法について教えている。

第六の部分は、本来、第三の部分で述べられている十二種類の毒物それぞれに関し、その毒をこうむった者の中毒症候を述べ、更にその処置、及び治療に用いられる解毒剤の処方、調合法、用法、効能を伝えていたものと思われる。しかしながら、十二種類の毒物のうち、第一番目から第七番目までの毒物に関しては、写本が脱落している。従って、此所では、第八番目から第十二番目までの毒物に関する前記の記述が残存しているのみである。

第七の部分は、衣類、香料、軟膏、洗身用水、クフル墨等に入れられる十種類の毒物の製法、用法、効能を述べ、またそれぞれの毒物についてその毒をこうむった者の中毒症候、その処置、及び治療に用いられる解毒剤の処方、調合法、用法、効能を説明している。

第二の部分から第七の部分を通じ、各所に魔術的、伝説的要素が認められるが、かかる要素の混入は、当時の

毒物書にあつては、極めて普通の事柄であつた。

本書で用いられている重量の単位は次の通りである。
バグダードの標準による。

1 ハツバ……大麦一粒の重量

1 ダーニク…… $\frac{2}{5}$ ハツバ

1 デイルハム……6 ダーニク

1 ミスカル…… $1\frac{3}{4}$ デイルハム

1 ウーキーヤ…… $7\frac{1}{2}$ ミスカル

1 ラトル……12 ウーキーヤ

1 ラトル……90 ミスカル

1 ハッルーバ…… $\frac{1}{8}$ ダーニク・いなごまめの種子一粒

の重量

1 ウーキーヤ……ほぼ1 オンス

1 ラトル……ほぼ1 ポンド

註

(1) 本書の現存写本は次の通りである。

Cairo, Dar al-Kutub al-misriya 60 tibt; Berlin
6411; Baghdad Ma'had al-dirasat al-islamiya 389;
Jerusalem, Khālidīya 10 tibt; Bairūt, Bibliothèque
Orientale de l'Université St. Joseph 284; Damascus,
Zāhiriya 39 tibt; Istanbul, Esad Efendi 2491;

Baghdād, al-Mathaf al-'Irāqī 1698.

ハサニシイサ' Fuat Sezgin: Geschichte des Arabischen Schrifttums, Band III, Leiden, 1970, p. 197

又 Manfred Ullmann: Die Medizin in Islam, Leiden/Köln, 1970, p. 324. 註 13. 本邦に在る原文とイン語訳を伴った本書の研究が、ベッティナ・シムルマン博士の著である。 Bettina Straus: Das Giftbuch des Sānāq. Eine literaturgeschichtliche Untersuchung. in 「Quellen und Studien zur Geschichte der Naturwissenschaften und der Medizin IV, 89-152(1935)」, dazu 66 Seiten arab. Text.

(2) Martin Levey: Early Arabic Pharmacology, Leiden, 1973, p. 18.

(3) Fuat Sezgin: op. cit., pp. 193-195. Manfred Ullmann: op. cit., p. 325.

(4) Fuat Sezgin: op. cit., pp. 194-195. Manfred Ullmann: op. cit., p. 325. Martin Levey: op. cit., pp. 15-16.

(5) Fuat Sezgin: op. cit., p. 194. Manfred Ullmann: op. cit., p. 325.

(6) Fuat Sezgin: op. cit., pp. 193-194. Manfred Ullmann: op. cit., p. 325. Martin Levey: op. cit., pp. 132-134.

(7) Fuat Sezgin: op. cit., pp. 193-195.

(8) Manfred Ullmann: op. cit., pp. 324-325.

(9) Ibn Abi Uṣaybi'a: 'Uyūn al-ambā' fī tabaqāt al-atibbā', Cairo, 1882, Vol. II, p. 33.

(10) Ibn al-Nadīm: al-Fihrist, hrsg. von Gustav Flügel, Leipzig, 1871, Band I, p. 303.

このことは「アル・フィフリスト」の「アラビア語で現存するインドの医学書の書名」という項に記されており、ヤフヤーはアラビア語への翻訳を依頼したものである。

(11) 以下のものが、アリー・ブン・サフル・ランズン・マッ・タズリー、サービト・ブン・クッラ、アッ・ラーシ、アル・マジューシー、及びイブン・シーナーの著作は、毒物論を含む医学書である。

(12) Martin Levey: op. cit., p. 137.

(13) Manfred Ullmann: op. cit., p. 325. Martin Levey: Medieval Arabic Toxicology, The Book on Poisons of Ibn Wahsiya, Philadelphia, 1966, pp. 13-15.

二 訳 文

毒物とテリアカに関する

(1) シャーナークの書

この書物はインドの賢人達の秘伝に由来する。王達は

この書物を金庫に入れてその子供達やその身边を取巻く家臣達から防ぐのが常であった。この書物は、それを見ただけで毒性を生じる毒物すべてについての知識並びにそれに触れると毒性を生じる毒物すべてについての知識、毒物を味わうことによりそしてまた毒物が胃のなかに達することによりその人間に振りかかること、毒入りの食物と毒入りの飲物の特徴並びにその他人間が食べる湿性の果実や乾性の果実のうち毒入りのものの特徴、衣服や敷物や寝具のうち有毒なものの特徴並びに身体に触れるもの、即ち毒入りの洗身用水やグリースやクフル墨⁽²⁾の特徴、必要とされる毒物調合法並びに即効性毒物と呼ばれるに強力な合成毒物の調合法及びそれ等に対するテリアカの調合法、如何なる毒物も蛇もテリアカを用いる者には害を与えることができないのに準じて毒物と毒蛇すべてに対するテリアカについての記述、及び発病剤や催眠剤や麻醉剤並びにそれ等の解除法についての記述を含む極めて貴重で著しく重要な書物である。

神がわれ等の長なるムハンマドとその御一族並びに御一統を祝福されんことを。神が最後の審判の日までそれ等の方々にいつも変ることなく救いを授けられんことを。神さえあれば我々はそれで十分。なんと素晴らしい

毒物とテリアカに関するシャーナークの書

保護者であろうか。

慈悲ふかく慈愛あまねき神の御名に於いて。

神にあまた称えあれ。神こそは称讃を受けるにふさわしい御方。神がムハンマドと善良にして優秀なその御一族を祝福されんことを。神がそれ等の方々に大いに救いを授けられんことを。

案出される毒物に関する

インドの人、シャーナークの書

シャーナークはインドの偉人であり、彼と同時代の人々の間で高い評価を受けていた。その人がこの書物を著わしたのである。彼はこの書物のなかで様々な方策を用いてつくり出される毒物を示し、また、神の御意に適えば、毒物に対抗し、毒物を除去し、毒物の害を駆逐するものに関する手引を示したのである。そしてインドの人、マンカ⁽³⁾がこの書物をインドの言葉からペルシャの言葉に翻訳した。そしてアブー・ハーティム・アル・バルヒー⁽⁴⁾として知られる男がペルシャ語の原文を用いてそれを「アラビア語に」翻訳する任に当った。彼はそれをヤフヤー・ブン・ハーリド・ブン・バルマク⁽⁵⁾のために翻訳したのである。それからまた、それはアル・マアムーン⁽⁶⁾

のためにその御抱え学者、アル・アッバース・ブン・サ
 イード・アル・ジャウハリーの手で「アラビア語に」翻
 訳された。彼はアル・マアムーンに対してそれを読み聞
 かせることを委任された人である。

アル・アッバース・ブン・サイード・アル・ジャウハ
 リー曰く。インドの偉人、シャーナークは、彼のこの書
 物の冒頭に於いて、神を称讃し神を讃美し仏陀の長に宣
 誓した後、次のように述べている…

あまねく行きわたる純粹な慈悲は心のなかの妬みを抑
 止する。妬みは憎しみを引起こす引金となる。憎しみは
 秘められた心のなかに敵意を生じさせる。心中の秘め事
 は二つに分けられる。その一つは隠される秘密の意向で
 あり、他の一つはあらわにされる敵意である。〔原文欠〕
 「あらわにされる」敵意は、主権の奪取のような滅亡を
 迫ることにあらさまに示され、軍隊の動員、戦闘隊形
 への配置、軍旗の前進、太鼓の連打、完全武装による武
 装と装備にあらさまに示され、そして心と胸が秘めて
 いる損失の重大さと苦悩のひどさを表明することにあか
 らさまに示されるのである。友となることができるかど
 うかを注意深く見つめること「が必要である」。警告と、
 不注意のうたた寝から求められる教訓とが、このような

ことのなかに存在する。

隠される秘密の意向からなる他の一つ「〔心中の秘め
 事〕は、会う時にうわべは愛相良く見せかける敵対者達
 の謀叛である。従って、恵みを以て彼等に報いることが
 期待されるのである。こちらの方は、〔心中の秘め事の〕
 二つの局面のうち一般的な害に関して最も激しく、また
 友好関係の決裂に関して最も急速な局面である。それ
 は、即座に身体から活力を取り去る毒物で敵対者達を毒
 殺することにとえらるる。

敵を滅ぼすに際し、最も人目につかぬ致命的な武器で
 あり、意図される効果に於いて最も激しく、そして出所
 に於いて最も身近なのは、即効性の毒物である。それは
 幾つかの部類に分けられる。そのなかには、死をもたら
 す爬行動物がその白い牙やその突起した尾のなかに隠し
 ているもののような、そしてまた食用にされ或いはまた
 衣類用にされるその他の海や陸の動物が隠しているもの
 のような、動物から生じる自然のままのものがある。ま
 たそのなかには、根、枝、葉、花、種子、及び果実のよ
 うに、植物から生じるものがある。またそのなかには、
 様々な種類の岩石からなる鉱物がある。またそのなか
 に、鋭利な剣や、投槍や、槍や、射手によって射られる

ものや、それ等と同じような装具のように、賢人達が鉄鉱石から作ったものから見出されるものがある。

これ等の毒物については、我々のなかの或る男が石を持上げるのに力が及ばなければ彼はその石を持上げるのに彼と同じような別の男の助けを必要とすることを我々が経験するのと同じように、都合の良い時にこれ等の毒物から得られるものの範囲で、これ等の毒物の間で組合わされたり対にされたりして、一体にされたものが完成するのである。

次いで、賢人シャーナーク曰く。

慈善行為に関して大半の人達は、行動によって善事を最大限に明示する者達であり、また慈悲をでき得る限り十分に施す者達である。そして慈悲深さと慈善行為に最も満足を感じる者達は、人々のために最も有益な者達である。王達のもとで、慈善行為は頂点に達しそしてその「効果が」発現する。慈悲は、それが溢れるほどになりそして広く行きわたるようになると共に目的に到達するのである。

従って、そのような王達は、続いて起こる諸民族の王達のうち彼等と同時代の者達の悪質な所業や、財産に対する子供達とか兄弟達とか親族達の烈しい欲求や、平手

打ちや皮肉によって感情を害された側近とか臣下とか従者達から身を守ることができる資格を最も有する人達なのである。

次いで、賢人シャーナーク曰く。

人々は、病気を近づけぬために健康を持続させることを必要とするが、たとえその効用が優れているとしても彼等が軽視してきた事に意を用いることについては躊躇し、そしてたとえその結果が有害であるとしても彼等が必要であると判断してきた事を正しいと見做すのである。そして、人々のうちで、健康を持続させ、検診の適切さと損傷との苦闘によって、病気を追払うのに最もふさわしい者達は、人々の王達である。王達には、布告に異議を唱えられることとか、不幸な出来事の和解とか、統治の危機とか、諸事に支障をきたすこととか、威光が尽きることとかが伴い、また王達の御蔭で人々の流血が阻止され、人々の街道が安全となり、人々の生活様式が確立し、人々の眼が喜びで一杯になるのである。

王達は、たとえ彼等が臣民のために存在しているとしても、人間であるということの枠の範囲内では対等である。王達は、彼等が負うている事柄、即ち彼等の義務を遂行し、臣民を敵から守り、臣民に対し諸事について留

意し、街道に於ける臣民の安全に気を配ることを以てする適切な管理によって臣民を統治する、王国の君主たる支配者なのである。

それ故、王達にあつて、彼等のうちで運命に関して最も幸福であり、地位に関して最もふさわしく、名誉に関して最も偉大な者は、その思考と関心と心使いのこまやかさと思遣りとを臣民の福利と臣民に対する心からの助言に向ける者であつた。このようなことは、四体液配合の均衡に基づいて彼等の身体に良好な状態を生じさせる事を実行することによってしか起こり得ない。そうすることによって獲得された体質の健全さは、生涯の喜びと生活の快適さ〔をもたらすのである〕。

賢人達の見解によれば、生涯には幸運と重大な危難とが付随している。従つて、災難に対する備えを、それを必要とする時に先立って、万全にしておくことが、思慮分別のある人にとって肝要である。最も望ましいことは、何よりも先ず備えを万全にして置くことが賢明であると思ふされ、また生涯と生涯の幸福とを致命的なことから守ることが、備えを万全にして置くのを遅らせることによつて、おろそかにならぬことである。

何故ならば、生涯には、大いに望まれることと望まれ

ぬことが組合わされて付随しているからであり、また生涯には、起こりそうな偶発事と起こりそうもない偶発事とが併存するなかで、理性ある人をして、その人が偶発事を閑却していることから、偶発事に対して準備を整えるように、覚醒させるようなことが付随しているからである。従つて、偶発事について熟慮し、そして偶発事に対して用心せよ。

起こりそうな偶発事に関して言えば、〔それは〕人体の構成要素である人体の四体液〔の動揺〕であり、それは滋養物や食物の増減、それ等の熱の過剰、及びそれ等の寒の過多と共に、それ等の粗悪さから起こり、或いはまたそれ等が必要とする時以外の時にそれ等を摂取すること等から起こされるのである。

起こりそうもない〔偶発事〕に関して言えば、それは信用のおける人から、そしてまたそれが身近にあることによつて人が喜ぶ物から、時として生じる致命的なことである。それ等の致命的なことのなかで武器として最も人目につかずまた撲滅手段として最も強力なのは、我々が前に述べた毒物である。秘密のうちで最もわかりにくいのは、同志達や使者達や従者達のうちに隠されているものである。何故ならば、彼等は、信頼される、親密

な、尊重される立場にあるからである。毒物は、慎重な策略によって、また高価な贈物を通じて、食物や、飲物や、香料や、経口薬剤や、樹脂や、グリースからつくられた軟膏のなかに振りかけられ、また風呂場の用具のなかに振りかけられ、またその他毒物がほとんど見えぬように隠蔽される衣服とか下着とか上着のようなもの及び同様な種類のもののなかに振りかけられる。損害に於いて最も激しくまた破壊に於いて最も急速なものは、人が細心に巧妙にそして弁舌さわやかに企んだものである。

我々は、そういうものについて必要とされることのすべてに関し、多少なりとも適切な事柄を述べようとするものである。それ等の事柄というのは、我々が見つけたものからそしてまた我々の先人が試したものから、それ等の毒物が如何にしてつくられるのかということである。また我々は、毒が「身を」襲いまた「身に」及んだ際、毒に対抗し毒を撃退するものについて述べ、そしてまた、毒をこうむった際、先んじて現われる徴候について述べる。我々が試してきたものによって、そして我々が我々の王達の金庫のなかにしまつて保持してきたものによって、我々の精一杯の努力と工夫の才を以て処置を

行う者は、損害をこうむる心配がないのである。

我々は古の仏陀達の長の御助力におすがりする。その御方こそ慈悲深い方達のうちでも最も慈悲深い御方。アーメン！

註

- (1) 古代インド、マウリヤ朝(BC三一七年頃—一八〇年頃)のチャンドラグプタ王(在位BC三一七年頃—二九三年頃)時代の宰相。シャーナークはCāṇakyaの転訛。
- (2) 粉末状のアンティモニー。眼瞼を黒く彩るための化粧粉として用いられる。
- (3) アッバース朝カリフ、アッ・ラシード(在位七八六年—八〇九年)治下のイラークにインドから渡つて来たインド人医師。マンカという名前は恐らく Māṇikya から転訛したものであるとされている。アッ・ラシードの知遇を得、その許で医療に携わった。一時期、ジュンデイー・シャープールの病院に勤めていたと言われている。インド医学の紹介に貢献し、本書をペルシャ語に翻訳したといわれている他、古代インドの二大医学書の一つとして有名な「スシュルタ・サムヒター」と、「インドの薬物の名称集」をアラビア語に翻訳したといわれている。
- (4) 経歴不詳。

- (5) カリフ、アッ・ラシード時代の宰相。八〇五年歿。
(6) アッバース朝カリフ(在位八一三年—八三三年)。
(7) アル・マアムーン付きの天文学者。幾何学にも通じ、
ユークリッドの「幾何学原本」の註釈を行った。

執筆者紹介

野村 実	防衛大学校教授
村山 光一	慶應義塾大学文学部教授
松田 和晃	杏林大学社会科学部専任講師
川田 純之	栃木県立小山西高等学校教諭
宇野 善康	慶應義塾大学文学部教授
稲葉 隆政	慶應義塾外国語学校講師(アラビア語)

訂正とお詫び

第五六卷第三号掲載の三宅和朗氏の論文中、三二(二九四)頁と三三(二九五)頁の間に綴込むべき次の表が脱落しました。ここに訂正し、三宅氏ならびに読者の皆様にご迷惑をおかけいたしましたことに深くお詫び申し上げます。

(編集責任者)